

2011年11月16日

コンプライアンス・CSRレポート
(2011年度 上半期)

関西テレビ放送株式会社

目次

第1	はじめに	(1)
第2	2011年度上半期の経過	(2)
第3	番組制作等について各部門の取り組み	(4)
	(1) 放送倫理会議の活動	(4)
	(2) 本社 番組編成制作部門の取り組み	(5)
	(3) 東京 番組編成制作部門の取り組み	(7)
	(4) 報道部門の取り組み	(9)
	(5) スポーツ部門の取り組み	(11)
	(6) メディア戦略部門の取り組み	(13)
	(7) ライツ開発部門の取り組み	(13)
	(8) 技術部門の取り組み	(15)
	(9) 営業部門の取り組み	(17)
	(10) イベント開催部門の取り組み	(18)
	(11) 番組審議会の活動	(19)
第4	視聴者の方々とのつながりやメディアリテラシー活動	(21)
	(1) オンブズ・カンテレ委員会の活動	(21)
	(2) お問い合わせ等への対応状況と「月刊カンテレ批評」	(23)
	(3) メディアリテラシー推進活動の現状	(27)
	(4) 節電エネルギー対策等全社の取り組みについて	(30)
	(5) 会見等、企業情報開示の状況とホームページ掲載実績	(30)
第5	コンプライアンス態勢の構築	(32)
	(1) リスクマネジメント態勢について	(32)
	(2) 情報セキュリティ態勢について	(32)
	(3) コンプライアンス・ラインの運用について	(33)

第6	経営機構等について	(34)
	(1) 機構改革と現状について	(34)
	(2) 関係会社とグループ政策について	(34)
第7	放送人倫理の確立に向けた 教育・研修等	(36)
	(1) 社内研修について	(36)
	(2) 放送倫理・コンプライアンス研修会について	(36)
第8	おわりに	(38)

第1 はじめに

東日本大震災や円高、それに海外経済の鈍化という厳しい状況下で2011年度がスタートしました。また、7月24日には、東北3県を除く全国44都道府県でアナログ放送が終了して、完全デジタル放送に移行となりました。

放送を取り巻く環境は変わりつつありますが、公共の福祉を目的にその健全な発達を図るため、私たちは放送番組の質の維持向上はもちろん、視聴者の皆様に対するサービスの向上を全社一丸で目指しております。

私たちは、放送のサービスエリアを最重視し、関西という風土や文化に根ざした、このエリアで最も必要とされるコンテンツメーカーを目指します。

私たちは、放送本業をより強固なものにし、視聴者やクライアントに信頼されるメディアとして、エリアのライフライン機能をいっそう高めてまいります。

そして開局以来蓄積したノウハウを活かし、総合的なコンテンツメーカーとして、安定的な成長を目指し、エリアで得られた信頼を糧に、エリアから外に向けた発信力をも高めて参ります。

この「コンプライアンス・CSRレポート」は、このような私たちの取り組みを視聴者の皆さまにご覧いただきたく、その活動状況の詳細をご報告するものです。何卒ご理解をいただければ幸いです。

第2 2011年度上半期の経過

- 4月 1日 (金) 新卒社員 12名入社
- 4月 11日 (月) 第21回放送倫理・コンプライアンス研修会
「街場のメディア論」(内田樹 講師)
- 4月 13日 (水) 大韓民国 株式会社文化放送との友好協定締結
- 4月 13日 (水) 阪急百貨店4店舗で「よ〜いドン!食覧会」(第2回)開催(〜5/3)
- 4月 13日 (水) 新入社員に対し、コンプライアンス関連研修
- 4月 17日 (日) メディアリテラシー番組 「テレビのミカタ」放送
(テーマ:「高校生が作ったドキュメンタリー」)
- 4月 18日 (月) ザ・ドキュメント「父の国 母の国〜ある残留孤児の60年」
ヒューストン国際映画祭最優秀賞受賞
- 4月 22日 (金) オンブズ・カンテレ委員会 第8回開催
特選賞 番組・DVD部門 DVD「おかえりなさい はやぶさ」
イベントその他活動部門「大阪平成中村座」に決定
- 4月 24日 (日) 月刊カンテレ批評「震災で番組演出はどんな影響を受けたか?」放送
- 4月 25日 (月) スタジオ照明にNECとの共同開発「LEDブロードライト」導入
- 4月 26日 (火) ACAP(消費者関連専門家会議)にて社員アナウンサーが講演。
テーマ「プロに学ぶ話し方、伝え方」
- 4月 28日 (木) 当社開発「リアルタイム字幕システム」、放送番組技術賞受賞
- 4月 29日 (金) 映画「阪急電車」全国公開
- 5月 ~ メディアリテラシー活動 高校生によるドキュメンタリー制作支援
(阪南大学高校、兵庫県立武庫荘総合高校)
- 5月 16日 (月) クールビズ 繰り上げスタート(〜9月末)
- 5月 22日 (日) メディアリテラシー番組「テレビのミカタ」放送
テーマ:「スポーツドキュメンタリーとメディアリテラシー」
- 5月 27日 (木) 決算取締役会 決算取締役会報告社長記者会見開催
- 5月 26日 (木) 「ダイヤモンドカップ2011」チャリティー開催(〜30日)
- 5月 29日 (日) 月刊カンテレ批評「放送局が映画を作る意味」放送
- 6月 17日 (金) 人事異動及び機構改革
- 6月 19日 (日) 「テレビのミカタ」放送 テーマ:「映画とメディアリテラシー」
- 6月 24日 (金) 第70回 定時株主総会開催
- 6月 26日 (日) 第51回 3000人の吹奏楽開催
- 6月 26日 (日) 月刊カンテレ批評「野球中継を考える」放送
- 7月 13日 (水) メディアリテラシー活動 大阪府立東住吉高校へ社員を講師派遣
テーマ:「テレビ局の仕事」

- 7月13日(水) 第3回 コンプライアンス委員会開催
- 7月16日(土) スマートフォン版webサイト「KTV SMART」サービス開始
- 7月17日(日) 「テレビのミカタ」放送
テーマ:「オープンスクール@カンテレーを振り返る」
- 7月24日(日) アナログ停波。完全地上デジタル放送開始。
- 7月25日(月) オンブズカンテレ委員会 第9回開催
- 7月31日(日) 月刊カンテレ批評「地デジ これがゴールではない」放送
- 8月4日(木) 第22回 放送倫理・コンプライアンス研修会
「消費者視点から考える情報品質」(大久保育子 講師)
- 8月4日(木) 「クーザ」大阪公演開幕
- 8月12日(金) 夏季社長定例記者会見
- 8月21日(日) メディアリテラシーイベント「オープンスクール@カンテレー」開催
- 8月21日(日) 「テレビのミカタ」放送 テーマ:「第2回 テレビ番組制作実習」
- 8月28日(日) 「第10回アナウンサー朗読会」開催
- 8月28日(日) 月刊カンテレ批評「デジタル時代の放送局番組の課題」放送
- 9月10日(土) 報道スペシャル「スーパーニュースアンカースペシャル
～2つの被災地から東日本大震災6ヵ月～」放送
- 9月15日(木) 当社開発「リアルタイム字幕システム」民放連盟賞 技術部門・優秀賞受賞
- 9月16日(金) メディアリテラシー活動 大阪市立中学校へ社員を講師派遣
テーマ「東日本大震災をどう伝えたか」
- 9月17日(土) 映画「アンフェア the answer」全国公開
- 9月18日(日) 「テレビのミカタ」放送 テーマ:「オープンスクール@カンテレー」
- 9月25日(日) 月刊カンテレ批評放送 テーマ:「男性目線の番組作りを考える」
- 9月30日(金) メディアリテラシー活動 泉南市立小学校へ社員を講師派遣
テーマ:「ニュース番組ができるまで」

第3 番組制作等について各部門の取り組み

(1) 放送倫理会議の活動

2009年6月より、コンプライアンス担当取締役を座長に、編成制作局、報道局、スポーツ局、営業局、ライセンス開発局、メディア戦略局の責任者が出席し、番組および放送全般の倫理にかかわる課題を討議する「放送倫理会議」を毎月1回開催しております。

「放送倫理会議」は当社内の番組審議会審議事項、オンブズ・カンテレ委員会の討議内容、また、社外からの声として、視聴者からのご意見、苦情や、日本民間放送連盟、BPO（放送倫理・番組向上機構）の決定などを社内に周知させる場としても機能しています。以下、2011年度上期に6回開催された放送倫理会議の主な内容です。

*第24回（4月19日）

- ・スタッフ等がインターネット上のツイッターやブログなどを番組宣伝に利用することの是非、利用する場合の注意点などについて、検討を行いました。
- ・スポーツ部から、当社が試合を中継放送していたプロレス団体所属の人物が、覚せい剤使用で逮捕された件について報告があり、名義主催の返上、番組制作、放送の中止などの決定について説明がありました。

*第25回（5月17日）

- ・第三者委員で構成された「オンブズ・カンテレ委員会」による特選賞番組・DVD部門に「おかえりなさい はやぶさ」、イベント部門に「大阪平成中村座」が選ばれたことが報告されました。
- ・「スーパーニュースアンカー」において、コメンテーターの青山繁晴氏が福島第2原発を訪問した際に撮影した映像を放送した件、及びそれに関して青山氏が政府関係者から受けた批判に対し、番組内で反論を展開した件の是非を巡り、議論を行いました。

*第26回（6月15日）

- ・BPOにおいて審議中の他局情報バラエティー番組「月曜プレミア！ 主治医が見つかる診療所」や「イチハチ」における取材相手に関する事実確認のあいまいさに関する問題について、過去の例を含めた当社での発生リスク、現場スタッフに対する注意喚起の必要性、方法などを検討しました。
- ・前年に企画段階で検討した自衛隊を取材対象としたDVDパッケージ素材が放送されたことに伴い、制作担当部署の説明を受けるとともに、その内容に関して会議メンバー間で議論を行ないました。

*第27回（7月19日）

- ・前週に開催された番組審議会において、放送法改正に伴って番組分類基準を諮問し、承認の答申を得た旨の報告がありました。
- ・BPOから発表された「若き制作者への手紙」について、内容についての各出席者の

意見を聞くとともに、どのように現場スタッフへの浸透を図ればよいのかなどを検討しました。

***第28回（8月22日）**

- ・以前より検討を続けてきた「関西テレビ放送 番組制作ガイドライン」改訂委員会メンバー案の発表、今後の制作スケジュールの説明がありました。
- ・東海テレビの番組「ぴーかんテレビ」において、原子力発電所事故に関して不適切なテロップが放送された件の経緯について、各部署に届いている情報を提供するとともに、同じようなことが当社でも起こりうるのか、防止ためにはどうすればよいのかなど議論しました。

***第29回（9月21日）**

- ・前月に引き続き、東海テレビ「ぴーかんテレビ」の問題について、東海テレビが制作、発表した検証番組、調査報告書を検討し、関西テレビにおいて取るべき対策を検討しました。
- ・全国の都道府県で暴力団排除条例が施行されたことに伴い、民放連、在京テレビ局に対して反社会的勢力との取引きを根絶するよう強い働きかけがあることから、番組制作上注意すべき事項などについて論議しました。

（2）本社番組編成制作部門の取り組み

1）編成について

今年3月11日に発生した東日本大震災では、死者、行方不明者あわせて2万人を超える大惨事となりました。また台風12号が当社の放送エリア内にあたる紀伊半島で明治以来とも言われる大きな災害をもたらしました。関西テレビでも、報道機関として、また情報の伝達によるライフラインとして、その使命を果たすべく懸命に取り組んできました。

一方、7月24日にはアナログ停波・完全デジタル化を大きな混乱もなく完了することが出来ました。視聴者の皆様にとっては経済的負担となるテレビの買い替えも一気に進み、一時懸念された視聴率への影響もありませんでした。私たちはこれらのことを、視聴者の皆様が「テレビが必要だ」と思ってくださっていることの証しであると、感謝と決意を持って受け止めています。私たちはその期待を裏切ることなく、視聴者の信頼に応える確かなニュース・報道や、共感・感動・笑いというテレビならではのエンタテイメントをバランス良く配した編成をお届けし続けてまいります。

こういった激動の環境下で迎えた4月改編では、「テレビの価値をより高めたい」という大きなテーマに向かって、午後帯と深夜帯の強化に取り組みました。

午後帯においては、主婦を中心とした女性のための情報を強化した新番組「キキミ

ミ！」をスタートさせました。深夜帯においては若い世代の皆さんにもっとテレビのファンになっていただくことと、次世代の企画・人材の発掘・育成を目指して、月曜～金曜通してのバラエティアワー「ヨルパチーノ」を新設しました。

また当社制作・火曜22時の全国ネットドラマは、4月～6月に「グッドライフ」を、7月～9月には「チーム・バチスタ3 アリアドネの弾丸」をお届けしました。

さらに、4年前より続けております科学番組「S-コンセプト」についても、放送は下半期の11月26日ではありますが、近未来の生活に貢献するかもしれない科学技術の紹介をテーマにした「未来コーナール大学」の放送を予定しております。

2) 番組について

2011年6月に当社では、編成制作局が組織変更により編成局と制作局の2つに分かれ、制作局は制作部と美術部を担当することになり、各々よりきめ細かい組織運営で現場をフォローする体制を固め、今期もこれまでと同様に視聴者の方々がより興味を持って楽しんでもらえる番組の制作に取り組みました。

この期におけます主な番組として、午後2時台には、女性のための情報を中心にした新番組「キキミミ！」を月曜日から金曜日までの週5日間制作し、グルメや旅情報、芸能ニュースなどを放送しました。

また、深夜では若手の人材育成を目指して、月曜日から金曜日まで1時間のバラエティ番組「ヨルパチーノ」を制作。その中で、若手ディレクターが自分の企画する番組をコンペの形で競い合い、最優秀作品をレギュラー番組にする企画を立てました。その結果「ものを完成させるには人の力を結集していかないと成し遂げにくい」ということをコンセプトにしたバラエティ「○(マル)本の矢」が10月からのレギュラー番組として放送されることになりました。

一方、従来からの制作番組につきましても、土曜朝の全国ネット番組「にじいろジーン」や金曜19時の「快傑えみちゃんねる」、月曜日～金曜日の毎朝9時55分からの生放送番組「よーいドン!」、さらには週末の「たかじん胸いっぱい」「モモコのOH!ソレ!み～よ!」、「お笑いワイドショーマルコポロリ!」などいずれも高い支持をいただいています。

「たかじん胸いっぱい」は、今期で放送開始から17年8ヵ月、放送888回を迎え、9月24日に5時間30分にわたる記念生放送を制作しました。

単発番組では、“元気が不足している日本でも、改めて再発見する文化や世界に誇れる習慣などを紹介する番組「世界が驚くニッポンの力!スゴイぞJAPAN」を制作、9月25日に全国ネットで放送しました。

その他、2010年11月21日に放送しました単発ドラマ「その街の今は」が、第7回日本放送文化大賞のグランプリ候補にノミネートされ、2011年11月1日に行われました民放大会で準グランプリをいただきました。

また制作局では、東海テレビ制作の番組「ぴーかんテレビ」での不適切テロップ放送問題や他局の不適切な放送について、決して他人事と考えることなく、ロケ取材や番組内容には特に注意を払うようにしています。コンプライアンスや放送倫理に関する研修などにも現場のスタッフが積極的に参加し、より良質で楽しんでもらえる番組制作に力を入れるよう心掛けております。

3) アナウンサーの活動について

当社では 2002 年から毎年、「アナウンサー朗読会」を開催しております。これは、ベテランから新人まで可能な限り多くのアナウンサーが参加し、物語等を会場の皆様にお聞かせする無料イベントです。

2009 年よりこの会場にチャリティ募金箱を設置させていただき、ご来場の方々からのお気持ちを FNS チャリティ基金へとお送りいたしております。8 月に行われた今回は、被災地岩手県在住のミュージシャンをゲストにお招きし、和太鼓の音を聴かせていただきました。

また、当社アナウンサー達による本社前での東日本大震災への街頭募金活動は、4 月から定期的に、現在も引き続き行っております。

(3) 東京 番組編成制作部門の取り組み

2011 年 6 月の機構改革におきまして、編成制作局内にありました東京コンテンツセンターが、コンテンツ業務推進、コンテンツ事業、編成、制作の 4 つの部を持つ局組織となりました。

1) コンテンツ業務推進部

2010 年 6 月に新設され、東京地区での番組及びコンテンツ関係の契約締結補助の他に、本社と並行して個人情報保護法や下請法等を含むコンプライアンス態勢の推進などを担当しています。今期は、番組及びコンテンツ関係の担当者に個別に法令や契約についての説明会を行うなど、コンプライアンス態勢の徹底を図りました。

2) 編成部

4 月から火曜 22 時ドラマ枠で放送しました「グッドライフ」の視聴率は、地域差が大きく出た結果となりました。7 月はシリーズ第 3 弾となる「チーム・バチスタ 3 アリアドネの弾丸」を制作、このシリーズを楽しみにして頂いている多くの視聴者から支持をいただきました。また、見逃し動画配信を KTV スマート（スマートフォン）でも開始し、番組終了後も引き続き実施しています。

単発番組では、日曜夕方ネット番組を3本[「映像体験！早送りイッキ見シアター」(5月)、「テンションあげまSHOW」(8月)、そして“元気が不足している日本に、改めて再発見する良いところや世界に誇れる習慣などを紹介する番組「世界が驚くニッポンの力！スゴイぞJAPAN」(9月)]、さらに、プライムタイムに昇格させての放送となったネット番組1本「映像体験！早送りイッキ見シアター」(9月)を放送しました。

今後もこのような形で、将来のレギュラー番組や単発番組を育てていく取り組みを続けていきます。

さらに、映画「アンフェア the answer」の公開に伴い、金曜プレステージ枠でスピンオフ企画となる「アンフェア the special～ダブル・ミーニング 二重定義～」を新たに制作・放送しました。映画「アンフェア the answer」は、公開1週間で観客動員数邦画1位を記録し、大変好評をいただきました。

番組販売業務では、作業の効率化や迅速な素材配送を目指し、番組素材の配送を従来のテープから新たにファイル伝送形式で行うよう、来春の稼働を目標に関係各所と調整しながら作業を進めています。

3) 制作部 (コンテンツ事業部を一部含む)

火曜 22 時の全国ネット・ドラマ枠を引き続き担当し、前項にありますように、4月クールの「グッドライフ」を自社制作し、制作スタッフの他、技術スタッフも当社の社員が参画致しました。7月クールは「チーム・バチスタ3～アリアドネの弾丸」の制作をメディアミックス・ジャパンに委託(放送権譲渡契約)をし、当社はプロデューサー1名が参画しました。シリーズ第3弾の今回も、当社の社員が企画から放送までイニシアティブを取りながら、番組内容についてのクオリティ維持に努めてきました。

フジテレビとの共同制作枠の日曜 22 時「Mr.サンデー」は宮根誠司・滝川クリステルの司会で丸1年を迎えますが、当社ではプロデューサー1名とディレクター1名が参画し、良質の情報番組制作に努めております。

その他のレギュラー番組「ゲータンヌーボ」「SMAP×SMAP」「さんまのまんま」なども好調に推移する中、ネット単発や深夜番組などのバラエティー番組を数々制作し、新しいバラエティー番組を企画開発するとともに、次世代を担うプロデューサー、ディレクターの人材育成にも努めています。

また、素人やタレントの卵を紹介するような実験的コンテンツを制作し、コンテンツ事業部の携帯動画配信ビジネスとの連携を行いました。

さらに、コンプライアンス関連の問題を話し合う場を日常的に設け、制作スタッフの啓発にも努めるなど制作部では、視聴率だけでなく内容面でも、視聴者の皆様から良質の番組を制作しているとの評価もいただいております、今後も視聴者の方々に喜んでいただける番組作りを目指してまいります。

(4) 報道部門の取り組み

2011年度は、3月11日に発生した東日本大震災の影響を大きく受ける状態で始まりしました。当社は、FNN(フジニュースネットワーク)の一員として、震災発生当日に1クルー(記者、カメラ、助手)と技術(簡易伝送機)をとにかく東北へと向かわせて以来、東北の系列3局への応援は、のべ20クルー(1週間ローテーション)にのぼりました。

さらには、デスク、内勤記者、ヘリ、中継スタッフ、編集、海外特派員、そして、ガソリンの手配などの現地支援も合わせてできる限りの応援を続けてきました。このFNNの応援体制は、9月の震災発生半年以降は、縮小されていますが、現在も継続しています。

また東北3県への当社独自の取材は、報道部、報道番組部合わせて、のべ30クルー以上となり、東日本大震災発生以降の「FNNスーパーニュースアンカー」(アンカー2部)特集の4割以上が震災関係となるなど、阪神淡路大震災を経験した局として全力で震災取材に取り組みました。これらの特集は、関西ローカルだけでなく、東北の各局でも放送され、東北3県のローカル報道にも大きく貢献しました。

そして、それら震災取材の集大成として、発生から半年に近い9月10日に特別番組「スーパーニュースアンカースペシャル 2つの被災地から東日本大震災6ヵ月」を放送しました。

また自然災害としては9月に、台風12号によって紀伊半島南部で大きな被害が出ました。規模も被害も戦後最大級といわれるこの大雨による被害に当たって、当社では、和歌山県的那智勝浦町、田辺市そして奈良県の五条市を中心に被災した地区の取材にあたりました。

土砂崩れで道路が寸断され、陸の孤島となってしまった奈良県の十津川村には、様々なルートで現場への到達をめざした結果、テレビでは先陣を切って地元から中継を行い、現地の様子をいち早く伝えました。

今回の大雨では、和歌山県南部の情報カメラの回線が寸断されたり、イリジウム電話がなかなか繋らないなど、東日本大震災でも指摘されていた問題が、改めて明らかになりました。これらを受け報道局では、今後の南海、東南海地震も想定したうえで、通信手段として、回線の安定している衛星電話の装備や情報カメラの更新、また取材陣の安全体制の確保などの課題に取り組んでいます。

毎日16時48分からお送りしています「スーパーニュースアンカー」(アンカー1部)では、政治・経済・外交といった全国ニュースを中心にレギュラーコメンテーターの解説を加えるなど、エリアの視聴者向けに独自の情報をわかりやすくお伝えしています。

アンカー1部としても、震災関係には大きく時間を割き、政府の問題、被災地の復興、原発労働者など、全国的な視点での切り口を中心にお伝えし、とりわけ水曜日レギュラ

一の青山繁晴氏が4月に独自に福島第一原子力発電所を取材した映像を放送して、大きな反響を得ました。

また、17時54分からの「FNNスーパーニュースアンカー」(アンカー2部)では、前述の通り震災関係を中心に特集を放送しましたが、福島第一原子力発電所の事故以降大きな関心事となっているエネルギー問題や夏場の節電、また原子力発電所を抱える福井県に隣接する地域としての自治体の取り組みなど、地元の問題として積極的に取り上げました。

福井県の5つの地区にある原子力発電所には、これまで1ヵ所にしか原子力発電所を監視できるカメラがありませんでしたが、東日本大震災を受けて、地元の福井テレビと共同で他の4ヵ所にも監視カメラを設置する準備を進めています。

また、「大阪都構想」をめぐる橋下大阪府知事と平松大阪市長の対立もヒートアップする中で冷静な報道を心掛けて行ってきました。

2010年11月にアンカー2部の特集として放送した、下半身が動かなくなった主婦が家族の支援を受けてマラソンに挑戦した取材が、ABU(アジア太平洋テレビ連盟)のテレビ・ラジオコンペティションのニュース部門で最優秀賞に選ばれました。

一方、お昼のニュース「FNNスピーク」では、ニュース原稿から字幕を自動的に生成し、ワンタッチで放送に乗せる「リアルタイム字幕システム」を独自に開発して、アナウンスコメントとの時間差が殆どなく、聴覚に障害のある方もニュースの内容を的確に把握できる字幕放送をお送りしています。このシステムは、民放連の連盟賞技術部門の優秀賞に選ばれました。

これらのデイリーニュースに加え、5月には大阪で暮らす脱北者を取材したドキュメンタリー「脱北者たち 大阪八尾に生きて」を、6月には、変わりゆく定時制高校の現状とともに、今学校に求められているものは何なのかを考えるドキュメンタリー「高校4年の春」を、より多くの方に見てもらおうべく、土曜日の午前に放送しました。

また6月には、2001年に起きた附属池田小・児童殺傷事件から10年を迎えるにあたり、「子供を守るとはどういうことか?子供の危機にどのように対応するべきなのか?」を問いかけ続けている教師や遺族たちの姿を10年間に亘り追いつけてきた取材をもとに、学校での安全について検証する番組「こどもたちを守りたい附属池田小事件 10年の願い」を放送、アンカー2部で何度も特集として放送した後、さらに追加取材をして犯罪を犯し社会復帰する人間を支援する人々、そして厳しい現実を描いた「生き直し」をドキュメンタリーとして放送しました。

その他、別項にもありますが、8月21日に開催されました当社のメディアリテラシー推進イベント「オープンスクール@カンテレー」では、スーパーニュースアンカーのスポーツコーナー「スポらば」のスタジオセットを会場に再現し、数多くの子供たちにキャスターやVTR編集を体験してもらいました。

また、記者がさまざまな学校を訪れ、震災取材の経験等を話すメディアリテラシー活

動「出前授業」も引き続き行っています。このように報道局では今後も、地域に密着した報道や社会に貢献する活動への参加などにも積極的に取り組んでいきます。

(5) スポーツ部門の取り組み

スポーツ局では2011年度上半期も視聴者の皆様に信頼され楽しんで頂ける良質な番組の制作・放送に努めました。スポーツならではの感動、感激を躍動感溢れる映像でお伝えすると共に東日本大震災の復興を支援する選手たちの姿、隠れた努力、苦悩をリアルにお伝えすることでスポーツ文化の発展にも貢献できる番組制作を目指しました。

4月からは、関西にゆかりのあるスポーツ選手に焦点を当てた地元スポーツ、地元選手を意識した番組を2本(毎週1回のレギュラー放送)制作しています。

また、新たな試みとしてスカパーJ S A T(株)と業務提携を結び、Jリーグ・セレッソ大阪のゲームの中継を始め、より地元スポーツに密着した放送を行っています。

1) 野球関連

地元阪神タイガース、オリックスバファローズのホームゲームやアウェイゲームを2月・3月のオープン戦を含め、今期も25試合放送する予定でしたが、東日本大震災の影響でプロ野球開幕が延期となり、放送本数も減少しました。結果、震災後初のセリーグ開幕試合となり注目を集めた4月12日の阪神ー広島戦を皮切りに18試合を放送しました。

単発番組では、9月22日に放送しました「かんさいプロ野球応援プロジェクト」で、阪神やオリックスの盛り上げだけでなく、アメリカ大リーグ・テキサスレンジャーズ所属の関西出身選手、上原浩治投手・建山義紀投手に関西の味「たこ焼き」を届ける企画などで、関西の視聴者の皆様にも大いにご好評頂きました。

また9月27日には、プロ野球の裏側を支える審判員の喜びや苦悩、知られざる姿を追った人間ドキュメント「ヤジにも負けず・プロ野球審判員」を放送しました。

2) 競馬関連

上期も4月の桜花賞・5月天皇賞・6月宝塚記念などのG Iレースを中心に、毎週日曜日「競馬 beat」を放送しました。番組では名馬企画を折り込む他、今年から始まった「WIN5」に注目するなど、視聴者の皆さんに幅広く楽しんで頂ける番組作りを目指しています。また、土曜深夜のレギュラー番組「サタうま」でも、競馬ファン以外にも楽しんでいただける番組作りを心掛けております。

3) ゴルフ関連

5月28日から30日の3日間、男子トーナメント「ダイヤモンドカップゴルフ」を放送しました。今年は「今、日本のために」をスローガンに、東日本大震災復興支援トーナメントとして開催しました。この試合は、開催地が千葉県であったため、余震の影響を考慮し、中継関連の設備も安全第一を考えた万全の態勢をとりました。

また、関西で活躍している多彩な分野のゲストと板東英二さんが水巻善典プロの指導を仰ぐゴルフレッスン番組「板東英二のゴルフ塾」をスタートさせ、当社のHPでも水巻プロの2分間で上達するワンポイントレッスン動画を配信しています。

4) サッカー関連

今年度からスカパーJ S A T（株）と業務提携を結びCS放送にてJリーグ・セレッソ大阪の中継を行う事になりました。これは中継ディレクター、技術スタッフの育成を兼ねた業務であり、スポーツ局の新しい試みです。サッカーの地上波中継が少なくなった昨今、その中継技術を維持、発展させる為にも大切な業務と考えています。

セレッソ大阪に関しては、子供たちに向けた選手のワンポイントレッスンなどを盛り込んだ情報番組「ゴラッソセレッソ」を4月から放送しています。

また7月31日には「なでしこJAPAN」サッカーワールドカップ優勝後の「なでしこリーグINAC神戸ー湯郷ベル」の中継し、話題の選手達が出場する試合を放送することができました。

さらにサッカー関連では、明日を担う若いJリーガーによるサッカーを題材にしたトーク番組「関西サッカー革命～Jリーグ活性化プロジェクト～」を4月24日に放送し、これからのサッカー界をどう盛り上げるかを討論するとともに、東日本大震災の被災者の皆さんに応援メッセージを送りました。

5) 単発番組

4月23日に関西が生んだフィギュアスケート界の2大スター高橋大輔選手と織田信成選手の密着ドキュメンタリー「世界フィギュア直前SP高橋大輔・織田信成 五輪からの再出発」を放送し、当社だけの独自映像に、多くの視聴者の皆さんから称讃の声を頂きました。

また、9月15日22日と2週にわたり高橋選手が、他競技のトップアスリートと生き方を語り合う、カキーン「高橋大輔×サムライ魂・天才たちの科学反応」を放送しました。

以上のようにこの期間も、地元関西を意識し視聴者の皆さんに喜んで頂けるスポーツの感動・魅力がたっぷり詰まった番組を放送してきました。今後も部員一人一人が、関西のスポーツ文化の発展に貢献できるより良質な番組の制作に取り組んでいきます。

(6) メディア戦略部門の取り組み

急速に台数を増加させているスマートフォン環境に対応するため、7月15日（金）から番組コンテンツを配信するスマートフォン版WEBサイト「KTV SMART」のサービスを開始しました。火曜 22 時の全国ネット枠での7月ドラマ「チーム・バチスタ3 アリアドネの弾丸」の見逃し配信に加え、「GTO」など過去の人気ドラマシリーズ作品や当社のローカル番組コンテンツも配信しております。

また、2011年7月24日の地上波テレビ放送完全デジタル化を迎え、デジタル環境でのテレビ視聴の利便性を体感してもらう試みとして、火曜ドラマでは継続的にデータ放送、ワンセグ、モバイルを使用したプレゼント企画を実施しています。

さらに、2010年末から始まりました当社のデジタルサイネージ実証実験の第2弾として、8月から当社社屋内エレベーター4機にサイネージモニターを設置し、社内情報を中心に運用を開始しました。

一方、ナレッジキャピタル関連ですが、うめきたグランフロント・ナレッジキャピタルゾーンのプレイベントとして行われた「ナレッジキャピタルトライアル 2011」で、提携しているアルスエレクトロニカ社の展示を行い、アルスエレクトロニカ社が開発した子供向けの知育玩具の体験などで好評を得ました。

その他、当社のホームページを通じ、山本浩之アナウンサーがお届けするポッドキャストでは、東日本大震災の被災者支援の一環として岩手県上閉伊郡大槌町で「なにわ元気まつり」を主催し、ポッドキャストを通じた被災地支援を呼び掛けました。このイベントでは「ヤマヒロのアナ Pod café」初のCDを販売し、売上金をイベント開催費用に充当しました。

このような状況の中メディア戦略局では、2011年度においても、これまで記載しましたようなインターネット事業等の実施に関する社内規程等の遵守をはかるとともに、様々な権利関係を適切に処理し、契約書などの作成も関連各部署との緊密な協議を重ねて遺漏のないチェックを行っています。

またweb、携帯を通じて取得する個人情報の管理については、各担当者が適切に管理できるようなシステムを導入しており、アクセスされる方々の安全を第一に考え業務を行っており、今後も引続きこのような態勢で、真摯にメディアの可能性を拓けていきたいと考えています。

(7) ライツ開発部門の取り組み

ライツ事業部では、地上波放送と関連する様々な媒体との相乗効果をめざし、視聴者の皆様により充実したコンテンツを、多様な方法でお届けしており、2011年度におき

ましても、以下のような事業を行ってきました。

まず映画事業ですが、2011年4月29日より全国公開致しました「阪急電車 片道15分の奇跡」では、プロデューサー、監督、撮影班はじめ多くの社員がスタッフとして製作に携わり、第3回沖縄国際映画祭で、「Peace部門」海人賞グランプリと、審査員特別賞ゴールデンシーサー賞の2冠を受賞いたしました。舞台となった兵庫県西宮市の映画館では公開7週間で最多動員数を記録したのをはじめ、今年度日本映画界の大ヒット作となりました。

5月28日からは、関西に多くのファンを持つベストセラー作家・万城目学氏の同名小説の映画化作品「プリンセス トヨトミ」を全国公開しました。大阪は独立した国家であり、大阪城の地下には大阪国国会議事堂が存在する——というSF的な設定の中で「家族」「親子」など普遍的なテーマを軸にストーリー展開した作品で、広く皆様にご好評いただきました。

また、2006年1月期の火曜ドラマ枠で初登場後2007年3月「アンフェア the movie」として劇場公開されたシリーズの第2弾映画作品「アンフェア the answer」が9月17日から全国で公開されました。検挙率ナンバーワンの敏腕刑事・雪平夏見に連続殺人の容疑が——もと夫・同僚・上司・検察・凶悪犯罪者らが迫る中、「最後の答え」を追う雪平刑事の戦いを描きます。この作品は「阪急電車」に続き、プロデューサーをはじめ多くの社員が製作に携わり、内容の面でも「阪急電車」同様全国多数のお客様にご覧いただき、現在も上映中です。

さらに、この期の出資映画としては「アンダルシア 女神の報復」「大鹿村騒動記」「ロック〜わんこの島〜」「うさぎドロップ」が公開されました。

その他、ライツ関連事業では、2011年度もドラマやバラエティ、スポーツ関連などを中心としたDVD12作品をリリースし、グッズ事業では、当社制作番組「さんまのまんま」内人気キャラクター“まんまちゃん”の「まんまちゃん・ハローキティ コラボグッズ」を製作、販売しました。

一方、2011年度上期海外番販事業では、関西テレビ制作番組を、以下の国の放送局へ番組販売いたしました。

◇「美しい隣人」(2011年作品)

- ・台湾 VIDEO LAND (Videoland Television Network)
- ・香港 TVB (Television Broadcasts Limited) (地上波)
- ・香港 TVB (Television Broadcasts Limited) (CATV)
- ・シンガポール Media Corp (Media Corp TV Singapore Pte Limited)
- ・タイ TVPC (True Visions Public Company Limited)

◇「リアル・クローズ」(2009年作品)

- ・シンガポール STARHUB (Starhub Cable Vision Limited)

◇「逃亡弁護士」(2010年作品)

- ・香港 PCCW (PCCW Media Limited)
- ◇「ギルティ悪魔と契約した女」(2010年作品)
 - ・台湾 VIDEO LAND (Videoland Television Network)
 - ・香港 TVB (Television Broadcasts Limited) (地上波)
 - ・香港 TVB (Television Broadcasts Limited) (CATV)
- ◇「三菱ダイヤモンドカップゴルフ 2011」(2011年作品)
 - ・韓国 SBS (Seoul Broadcasting System)

さらにライセンス関連イベントでは、昨年6月に1週間で10万人を超える方々にお越しいただいた当社初の番組・百貨店連動催事「よ〜いドン!食覧会」の第2回を4月13日から5月3日まで、阪急百貨店の4店舗で開催致しました。

このように映画出資・ライセンス開発各分野において当社では、著作権その他権利関係を適切に処理し、契約書等文書作成は担当者が編成制作業務部・コンプライアンス推進部社内弁護士と緊密な協議を重ね遺漏のないチェックを行っております。

(8) 技術部門の取り組み

2011年度上半期におきましても、関西エリアの視聴者の皆様により良い放送を届けるために、デジタル化への対応をはじめとする以下のような取り組みを行っています。

1) デジタル化への取り組みについて

2011年度もデジタル放送のエリア拡大のため、滋賀県に中継局を1局建設しました。これにより当期までに建設しました中継局は合計145局となり、7月25日からはデジタルのみの放送となりました。

また、アナログ放送終了に伴う視聴者の方からの問い合わせが7月24日以降急増し、7月24日だけで752件の問い合わせがありました。そのうち技術的な問い合わせが100件にのぼり、技術スタッフを増員して対応にあたりました。

その他、奈良県、和歌山県の一部地域の受信状況の改善のため、中継局の放送チャンネルを変更します。視聴者の方がこれに合わせて受信チャンネルの設定を変更するまでの期間、新・旧両方のチャンネルで放送を行い、円滑なチャンネル変更に努めます。

2) 放送の維持、安全・信頼性への取り組みについて

放送設備が災害により想定外の被害を受けた場合の放送継続について、必要な対策をキー局であるフジテレビと共同で検討しています。関東圏でフジテレビが甚大な被害を被った際の、準キー局である当社としての具体的役割について検討を開始しました。

また、東日本大震災は、関東地方や東北地方の局において放送用アンテナの倒壊、停

電による中継局停波など放送にも影響を与えました。近畿でも生駒送信所や中継局の災害対策として、生駒送信所の予備電源の充実、予備アンテナの構築など大災害時においても放送を確保するための予備システムの構築に取り組んでいます。同様に中継局の対策として、バッテリーや発電機などの予備電源の充実や発電機の燃料確保に取り組んでいます。

3) 制作技術の取り組みについて

制作技術局では、社内だけではなく社外に出て番組制作を行う事が頻繁にあります。その際一般の人や社外団体、またその施設と接する機会が多々あります。これらの作業や活動において、制作技術局ではコンプライアンス遵守と作業の安全重視を日常的な重点項目としてスタッフに徹底しています。

同時に高品質な番組制作のため技術力向上をめざしながら、新しいテレビ技術の研究・開発にも日頃より取り組んでいます。

・技術開発・技術力向上への取り組み

4月に「LEDブロードライト」が30台、第1スタジオに導入されました。従来の電球器具に比べ、消費電力がおよそ5分の1、発熱がほとんど無しとなり電気消費量の大幅削減に成功しました。実測結果ではひと月当たりおよそ5000キロワット（照明電力と空調電力を合わせて）省エネができたことになっています。照明器具のLED化は今後も続ける予定です。

9月には「民放連盟賞技術部門」で、報道技術部が実用化した「リアルタイム字幕システム」の優秀賞受賞が決まりました。3月の「映像情報メディア学会 放送番組技術賞」に続く連続受賞となりました。このシステムは、ニュース原稿から字幕を自動的に生成し、ワンタッチで放送に乗せるもので、アナウンスコメントとの時間差が殆どなくなり、聴覚に障害のある方もニュースの内容を的確に把握できるものです。

またこのシステムは、報道支援システムのニュース原稿から字幕データを自動生成し、OTCを利用して自動で送出制御するという全く新しい発想に基づいて開発し、「字幕制作/送出コスト0円」という低コストで実現することができました。午後の短いニュース枠からシステムの運用を開始し、約1年半が経過した現在では、原稿や項目の変更が頻繁に発生する昼ニュース枠でも運用していますが、極めて安定したニュース字幕放送を継続しています。このシステムが今後、低コストでニュース字幕の導入を検討しているテレビ局への一助となれば幸いです。

・報道中継への取り組み

3月11日に発生した東日本大震災では、発生翌日に系列技術応援として、衛星中継車班と可搬型衛星中継班それぞれ1班を現地へ派遣し、ヘリコプターを東京に派遣しました。その後も東北局、特に福島テレビに対する支援を続け、2週間単位で数回にわたり報道中継車とスタッフの派遣を続けております。

また、9月の台風12号による水害においては、発災後より約1ヵ月にわたり和歌山県・奈良県に中継車を送り込み、最大時4班の中継体制を敷きました。

さらに、各地にあるお天気カメラのHD化にも順次取り組み、2011年9月までに、神戸市内カメラ、神戸空港カメラ、明石海峡カメラなどのHD化を完了しました。

・ドラマ等制作への取り組み

制作技術局では、当社制作のドラマ等にスタッフを投入し、技術力の向上を図っています。2011年3月から6月にかけて、第1四半期の全国ネットドラマ「グッドライフ」には、カメラ・VE・音声・照明・編集とほぼ全技術分野において社員技術スタッフを派遣し番組制作にあたりました。

(9) 営業部門の取り組み

2011年度上半期は、東北地方を襲った未曾有の大震災の影響により、回復基調にあった経済情勢が再び後退するという、厳しいセールス環境下での営業活動が続きました。そんな中、地域社会に対する放送局の責務を果たすべく以下のような取り組みを行いました。

先ず全国ネットの作業においては、事業局と共に、5月の「ダイヤモンドカップゴルフ2011」を”東日本大震災復興支援トーナメント”として、選手会・JGTO協力のもと前夜祭ではチャリティオークション、予選ラウンド2日間ではチャリティ握手会を実施しました。またチャリティバザーの開催やギャラリープラザ内の各所に募金箱を設置し、大会期間中に集められたお気持ちを、震災復興の義援金として寄付させていただきました。(8月10日に6,521,770円をJGTOを通じ日本赤十字社に寄贈)また、ジュニアゴルファー育成の為、日本ゴルフ協会に助成金2,000,000円を寄贈させていただきました。

関西ローカルでは、8月6日に放送しました「夏だ祭りだカンターレ!おしゃべり芸能人灼熱のぶっちゃけ生トークSP」と連動する形で、縁日の雰囲気を出した視聴者還元イベントを実施し、ファミリーを主体とした参加者に楽しんで頂くことが出来ました。

その他営業局の取り組みとして、万博公園で行われている大規模市民イベント「ロハスフェスタ」に後援、参加しました。このイベントは、自然にやさしく、健康的な暮らし方を提案・実践するもので、毎回4~6万人もの動員実績のある催しです。4月・8月の計2回行われた本イベントにて、東日本大震災FNS緊急募金およびFNSチャリティーキャンペーンの募金活動を行いました。当社のノベルティグッズを用いて、多くの募金を寄贈することができました。

また、当社の機構改革により、CM部が6月から営業部門に所属することになりました。

た。CMは、視聴者の皆様が商品の情報を得たり購入するために、重要な機会を提供させていただいていると考えています。

CMのメッセージを正確に伝えるために、まずはCMの放送を確実にを行うことを第一義として、操作性や作業速度を改善し、自然災害また事件や事故などの緊急時に番組編成が変更された場合でも、即座に円滑に対応できるような体制にしています。

また、CM内容の考査については、視聴者の皆様が不利益を被らないように、適正な表現がなされているか公序良俗に反していないかなど、関係法令・社会情勢に照らして厳しく考査しています。営業部門といたしましては、今後も収益の増加と地域社会に対する貢献責任を両立させるため有意義な営業活動を推し進めて参ります。

(10) イベント開催部門の取り組み

事業局では、2011年度上半期も関西地区を中心とした皆様にお届けするため、演劇・ミュージカル・コンサートと様々なイベントを企画・開催しました。

中でも8月に梅田芸術劇場で開催いたしました劇団新感線の「髑髏城の七人」は、出演者の魅力と充実した内容でチケット発売と同時に完売、最もチケット入手困難な演劇のひとつとなるなど、観客の皆様の期待に応えることができました。

また、7月30日から約1ヵ月間、初めての試みとして「とうりゃんせ〜地図に載らない国道0号線〜」と題して、梅田の中心地にてお化け屋敷のイベントを開催し、予想以上の反響で、沢山の方にご来場いただきました。また、在阪局全局のニュースや情報番組でも取り上げられるなど、今後ますます地域の皆様に楽しんでもらえるイベントに発展させていける手ごたえもつかみました。

そして、51回を迎えた「3000人の吹奏楽」は、2011年も京セラドーム大阪にて開催いたしました。根強い吹奏楽ブームに支えられて多くの方にご賛同いただきました。今後も地域文化への貢献を目指し、長く愛され続けたメセナイイベントを大切にしていきたいと考えています。

FNS系列各局による震災等での緊急募金の窓口「フジネットワーク募金」の被災地支援、緊急募金活動を2010年度下期より継続し、イベント会場での募金呼びかけや募金箱を配布し、沢山の義援金が集まりました。5月からは2011年度のFNSチャリティキャンペーン（1974年にユニセフと協力して立ち上げ、フジテレビ系列28局からなるチャリティキャンペーン）も、社内各部署の連携協力を強化することにより、一つの目標であった1000万円以上の募金額を達成することができました。当社ではこのキャンペーンなどを通じ、今後も継続的な支援活動に積極的に取り組んで参ります。

(11) 番組審議会の活動

放送法を典拠とする放送番組審議機関として、「関西テレビ放送番組審議会」の強化について委員会運営改善の具体策を、番組捏造問題の反省と教訓にたち、2007年に委員会提言として頂きました。当社番組審議会委員の任期は、毎年7月から翌年6月であり、2011年7月より第53期番組審議委員会を下記委員に委嘱しました。

委員長	森下俊三	(西日本電信電話株式会社相談役)
委員長代行	瀧藤尊照	(四天王寺大学教授)
委員	飯塚浩彦	(産経新聞社大阪本社編集局長)
	井上章一	(国際日本文化 研究センター教授)
	上村洋行	(司馬遼太郎記念館 館長)
	大久保育子	(消費生活専門相談員)
	後藤正治	(作家)
	難波功士	(関西学院大学社会学部教授)
	平野鷹子	(弁護士)

今期の番組審議会では、改正放送法に定められた「放送番組種別の公表」制度に対応するべく、「種別分類」定義を7月開催番組審議会に諮問いたしました。そして「番組調和原則」に基づく5区分の番組種別分類、「報道、教育、教養、娯楽、その他」についての定義を承認いただきました。「その他」についてさらに「その他、通販番組」の下位分類の定義も承認いただきました。この分類定義は、日本民間放送連盟分類に完全準拠するもので、今後この定義により6ヵ月ごとに当社放送番組の種別分類を番組審議会にご報告し、当社ホームページ他で広く視聴者市民の皆様に公表します。

2007年、番組審議会より頂戴いたしました「提言」を繰り返して意識化し、2011年度上半期も、改善策「番組審議会のあり方」により、以下の改善点を引き続き実践してきました。

<改善策「番組審議会のあり方」>

- ① 審議対象番組の選定
 - ・ 審議会（委員長、委員長代行）と審議会事務局が合同で行う
- ② 討議を活性化する
 - ・ オブザーバー（制作担当者）をプロデューサー以外にも拡充する
 - ・ オブザーバーと委員との質疑応答を随時に
 - ・ 担当責任役員も当事者性に基づき発言する
 - ・ 委員の自由発言（当月議題以外でも）を拡充する
- ③ 諸情報の積極的開示と共有

- ・審議内容を社内外の従前以上に積極開示する
- ・審議内容への対応諸施策を次回審議会で報告
- ・視聴者の苦情・抗議、対応状況のより詳細な報告

<放送倫理会議への伝達>

2011年度上半期においては、③審議内容の社内各制作現場への周知について、「放送倫理会議」において、審議内容を速やかに伝達し、放送倫理会議においても情報と認識の共有化を実践しました。審議会出席の当社幹部から各々の局内への示達に加え、放送倫理会議でも周知することで 外部スタッフも含めた現場へのより徹底した伝達を企図いたしました。今後とも、番組審議会からの指摘や提言を、より実りある形で 現場周知することに 努力していきます。

<2011年4月から9月の番組審議会審議事績>

第524回番組審議会 (4月14日)

「東日本大震災と当社放送番組全般について」 (3月21日、27日放送番組など)

第525回番組審議会 (5月12日)

「SHINPUU～ニュージェネレーション!新番組争奪バトル～」

(4月7日、14日放送)

第526回番組審議会 (6月9日)

ザ・ドキュメント「脱北者たち 大阪・八尾に生きて」

(5月28日放送)

第527回番組審議会 (7月14日)

報道スペシャル「こどもたちを守りたい～付属池田小事件10年の願い」

(6月12日放送)

第528回番組審議会 (9月8日)

「テンションあげまSHOW」

(8月28日放送)

第4 視聴者の方々とつながりやメディアリテラシー活動

(1) オンブズ・カンテレ委員会の活動

「オンブズ・カンテレ委員会」は、2009年7月に設置された外部の有識者からなる委員会で、第三者の視点から番組などを中心に、当社に対して、広く論評、注意喚起、提言を行う組織で、2007年に設置した「関西テレビ活性化委員会」から名称変更したものです。

委員会は、蔵本一也委員長以下3名の委員で構成され、具体的には以下の活動を行っています。

①オンブズマン機能

視聴者情報部集約の意見、批判、苦情などを、吟味・検討し、調査を指示したり、当社に改善策を求めます。放送による人権侵害などの抗議、苦情に関しても、独立した立場で調査・検証し、当社に救済措置などの改善策を求めます。

また、放送倫理会議（前出）で扱われた内容を中心に専門家の立場から意見を述べたり、BPOなどで扱われた重要事案についても、放送の将来を見据えた委員会独自の視点で話し合います。

②内部的自由（制作者としての良心の確立）の保障について

当社の番組制作に携わる者が、放送番組基準に沿わない、良心に反する業務を命じられた場合など、事実関係を調査し、当社に対し注意喚起・改善などを求めます。

③特選賞について

独自の表彰制度を持つ意味は重要と考え、良質な番組や事業イベント等の制作を推奨する委員会として、他とは違った視点で表彰します。

2011年度上半期は4月に第8回、7月に第9回の委員会が開かれました。

1) 第8回 オンブズ・カンテレ委員会（2011年4月）

2011年4月の第8回委員会では、「オンブズ・カンテレ委員会特選賞」の受賞作品を決定し、表彰が行われました。

この「オンブズ・カンテレ委員会特選賞」は、委員が前年（2010年1月から12月）に放送された当社制作の作品（番組、番組内企画、DVD）ならびに、イベントやその他の活動について、上述のように独自の視点で良質なものを表彰するもので、募集方法ならびに審査の経過は、以下の通りです。

1月下旬 全役員・社員に特選賞について告知、作品等の応募受付開始。

2月上旬 作品等応募を〆切 番組・DVD部門17作品、のべ23件
イベント・その他活動部門9活動、のべ11件の応募

2月中旬	上記17作品ならびに9活動を投票対象に社員による第1次投票開始
2月 末	第1次投票の結果、番組・DVD部門上位6作品（第5位が2作品のため） イベント・その他活動部門の上位3活動を決定、第2次審査へ
3月	オンブズ・カンテレ委員会 全委員が、第2次審査を行う
4月上旬	各委員の採点を集計

この結果、特選賞番組・DVD部門には、ライツ事業部が制作したDVD「おかえりなさい はやぶさ」（2010年12月15日発売、番組12月25日放送）が選ばれました。

委員からは、「テーマに対する愛着、こだわりが生んだ素晴らしい科学教養番組だと思う。子どもの科学離れがいわれている日本で、はやぶさの帰還は久しぶりに宇宙への夢をかきたててくれ、この番組が池下氏の美しいCGやインタビューで、はやぶさ帰還という科学のテーマをわかりやすく伝えている」という感想や「ドキュメンタリー番組でありつつ、上質なエンタテインメントとなっている。作り手の思い入れや、このテーマに関わってきた蓄積が伝わってくる。登場する科学者たちがみな魅力的に見えるのは、それを引き出すだけの十分な準備の時間をかけているということなのだろう。今後のテレビ（局ないし番組）に、新たな可能性を感じさせる作品」などの講評がありました。

また、イベント、その他活動部門には、事業部が行いました「大阪平成中村座」（2010年10月～11月実施）が選ばれました。この活動について委員からは、「豪華な顔ぶれがそろったこれだけのイベントを、もっとも大阪らしい場所で開催した点を評価したい。多くのパブリシティをえて、芸能の都大阪をアピールすることができたと思う」といった意見や「大阪城公園での2カ月間の歌舞伎開催はイベントとして成功しただけでなく、大阪の魅力も高め、関西テレビの存在を地元の視聴者に強く印象づけた」などの講評がありました。

2) 第9回 オンブズ・カンテレ委員会（2011年7月）

第9回の委員会では、2011年4月から6月放送分の視聴者からの主な意見とその対応について確認しました。その結果、特に人権侵害に該当する事案はないと判断しました。

また、BPO放送倫理検証委員会で、2つの番組の3件について意見が出されたことに関して、委員から「他社の事例だが、インターネット情報だけに頼り、客観的に確かめることを十分しないのは問題」、「これらの事例を材料に制作者は、学習をしてほしい」などといった希望が出されました。

さらにアナログ放送終了関連での視聴者対応等について委員からは、「丁寧な対応をしていただきスムーズに移行した感がある。これから暫くの間も対応を宜しく願いたい」との意見がありました。

このように「オンブズ・カンテレ委員会」の委員の皆様には、様々な知識・経験に基づき、第三者の視点から当社の番組制作、放送を中心とした事業活動に忌憚りの無いご意見をいただいています。それは、当社にとって非常に不可欠かつ有意義なことであり、今後も当社の番組等につきました的確なご意見やご指導をいただけるよう望んでいます。

(2) お問い合わせ等への対応状況と「月刊カンテレ批評」

1) 視聴者の方々からのご意見について

2011年4月から9月までの視聴者対応件数（電話・メール・郵便）については、以下の通りです。

4月	総件数 6478件	(問合せ 3419件	苦情 1159件	要望 1000件	感想 500件	情報提供 178件	その他 222件)
5月	総件数 5900件	(問合せ 3251件	苦情 877件	要望 838件	感想 458件	情報提供 195件	その他 281件)
6月	総件数 5935件	(問合せ 3499件	苦情 837件	要望 756件	感想 388件	情報提供 213件	その他 242件)
7月	総件数 7552件	(問合せ 4230件	苦情 1516件	要望 955件	感想 455件	情報提供 158件	その他 238件)
8月	総件数 5936件	(問合せ 3279件	苦情 1023件	要望 804件	感想 366件	情報提供 193件	その他 271件)
9月	総件数 6445件	(問合せ 3143件	苦情 960件	要望 1397件	感想 517件	情報提供 160件	その他 268件)

これらの視聴者情報部で受け付けました視聴者の方々からの問い合わせ、要望、感想、苦情、情報提供等のうち、特定の番組専属「視聴者対応スタッフ」が担当しました対応件数については、「よ〜いドン!」154件、「スーパーニュース アンカー」473件、「FNNスーパーニュース アンカー」110件でした。また、各月のお問い合わせ等の主な内容は、次の通りです。

【4月】

- 6日「スーパーニュース アンカー」“青山のニュースDEズバリ!”のコーナーが震災でお休みの為「早くコーナーを再開して欲しい」等の要望が32件ありました。
- 7日「FNNスーパーニュース アンカー」“特集 食物アレルギー 被災地からのSOS”に問合せや感想が27件ありました。

- 12日 当社は「プロ野球中継 阪神×広島」を放送、フジテレビでこの日放送された「青春アカペラ甲子園全国ハモネプリーグ」が、当社では16日に放送され、放送日時の間合せや放送希望が121件ありました。
- 13日 「スーパーニュース アンカー」 “青山のニュースDEズバリ！” の青山さんの発言に対して、様々なお意見が72件ありました。
- 19日 「プロ野球中継 阪神×巨人」の試合開始前から雨模様だった為、試合の有無の間合せが36件「最初から最後まで放送して欲しい」などご意見が54件ありました。「関ジャニ∞のジャニ勉」の新コーナーに対するご意見が35件ありました。
- 27日 「スーパーニュース アンカー」 “青山のニュースDEズバリ！” で、福島第一原発内に直接取材に行かれた青山繁晴さんに称賛のお声、現場の所長さんに感動したお声、そのコーナーを全国放送して欲しいなどの要望が38件ありました。広島のマツダスタジアムで行われる「プロ野球中継 広島×阪神」が雨模様の為、試合の有無の間合せが79件ありました。

【5月】

- 4日 「スーパーニュース アンカー」 “青山のニュースDEズバリ！ 福島第一原発事故現場からの証言への波紋” に「感動しました」「応援しています」などの感想が71件ありました。また、青山さんの講演会「震災チャリティ緊急講演」の告知が番組内であり、詳細の間合せが63件ありました。
- 5日 「FNNスーパーニュース アンカー」 “特集 1000本の桜を被災地に” に「感動しました」などの感想が16件ありました。
- 11日 「スーパーニュース アンカー」 “青山のニュースDEズバリ！” の青山さんの警戒区域内への一時帰宅に対する発言に51件、また男性キャスターの「（菅総理は）浜岡原発を止めただけで調子に乗って」などの発言に、36件のご意見がありました。
- 17日 「グッドライフ」アナログ放送で映像にノイズが入り、「映像が乱れませんでしたか？」「再放送してください」等の間合せや要望などが14件ありました。

【6月】

- 2日 「キキミミ」のナレーションで「殺陣」の読み方に対しご指摘が67件ありました。
- 10日 「よ〜いドン！」 “発見！関西ワーカー（金）老若男女の筋力をサポートする トレーニングマシンプロデューサー” 身体に無理なく筋力アップができて、健康維持や介護予防のトレーニングマシンを設計、開発、製造する「株式会社 鍛錬」、トレーニングジムなどの間合せが345件ありました。
- 12日 「2011 F1 カナダGP 決勝」が激しい雨で約2時間もレースが中断し、最後まで放送されなかった為、再放送の間合せや再放送希望、レースの結果の間合せが51件ありました。
- 15日 「グータンヌーボ」でゲストの「主婦になると、たぶん腐っていくと思う」とい

った発言に対して12件の苦情がありました。

【7月】

アナログ終了を告知するカウントダウンスーパーが、7月1日（金）から画面左下に常時表示されました。「見づらい」「消して欲しい」などの苦情が初日だけで90件、アナログ放送終了まで181件ありました。

12日 「ブザー・ビート～崖っぷちのヒーロー～（再）」の第1話が2日に分けて放送された為、「昨日と同じのを放送してませんか？」などの問合せが55件ありました。

18日 早朝に編成された「FIFA女子ワールドカップ2011 決勝戦日本×アメリカ」は、PK戦の末に日本が優勝、日本に感動を与えてくれましたが、放送枠が日付変更に伴い2つに分かれていたので、試合の最後まで録画できなかったことへの苦情、再放送希望などが30件ありました。「HEY！HEY！HEY！700回直前みんな元気になる生放送スペシャル」が短縮放送であった為、「2時間ちゃんと放送してください」などのご意見や、出演者の問合せ、2時間の放送希望が632件ありました。

20日 「スーパーニュース アンカー」青山繁晴さんが海外出張でお休み、山本太郎さんの出演で問合せやご意見が95件ありました。

23～24日 「FNS27時間テレビ2011めっちゃ2デジッてるッ！笑顔になれなきゃテレビじゃないじゃ～ん！！」には放送時間の問合せや、「節電って言うてるのに、こんな放送は控えるべきです」とのご意見、またコーナーに対する苦情など、200件ありました。

24日 アナログ停波に対する入電数が、この日1日だけで752件、31日までに合計892件ありました。問合せ内容は様々で、地デジ化が済んでない方からのデジタル放送視聴方法などの問合せが320件、地デジ化は済んでいるのに視聴できないなどの問合せが306件でした。

28日 「キキミミ！」フジテレビが韓国彙員だ、と言うツイート騒動の俳優の話題の時に、司会者が「この2人の関係が韓流ドラマみたいですね。どうなるんでしょうか？交通事故かな、次は…」との発言について、80件以上の意見がありました。

【8月】

4日 東海テレビの「ぴーかんテレビ」で不適切な表現が表示された字幕テロップが放送されたことに対して22件のご意見がありました。

6日 「FNS歌謡祭 うたの夏まつり2011」で過去のVTRが多い演出に苦情が10件ありました。

18日 「スーパーニュース アンカー」“「子ども手当 存続」のビラ 野党側が怒り”で、男性キャスターが民主党が作成したビラを破ったことへの意見が10件あり

ました。フジテレビへの韓流偏重抗議デモについて、「取り上げてください」「なぜ報道しないのですか？」などのご意見が34件ありました。

またこの月には、島田紳助さんの引退報道に240件近くの電話やメールがあり、「クイズ！ヘキサゴンⅡ」には「番組はどうなりますか？」などの問合せが102件、「収録済みのものは放送して欲しい」「司会を代えて番組を継続してください」などの要望が29件、発端となった番組と一部報道のありました「紳助の人間マンダラ」に対して、さまざまなご意見が39件ありました。

【9月】

- 5日 台風12号で「スーパーニュース アンカー」が、緊急特番として急遽前拡大で放送された為、「美しい隣人（再）」が繰り上がりで放送され、放送時間変更に対する問合せや苦情が78件ありました。
- 8日 「FNNスーパーニュース アンカー」では、奈良県知事が災害時に東京出張で不在だったことについて、キャスターが「知事を辞めてください」と発言したことに対して、「言い過ぎだ」や、「よく言ってくれました」など賛否両論の感想が26件ありました。
- 19日 「ネプリーグGP」の短縮版放送にご意見など47件がありました
- 22日 「FNNスーパーニュース アンカー」では、橋下知事のツイッターの内容に対するキャスターの発言に、「応援しています」などの感想や、「ツイッターの発言に対して公共の電波を使ってコメントするな」などのご意見が32件ありました。
- 24日 「たかじん胸いっぱい 祝！888回で大感謝生激論&怒りの大暴走！？制御不能の5時間半！生放送スペシャル！！」の放送があり、200件以上のメールや電話がありました。山本太郎氏の出演に対して、「呼んで頂きありがとうございます」などの感想が82件、「反原発に偏っている」などのご意見が26件ありました。
- フジテレビで放送している「もしもツアーズ」の新レギュラーにKis-My-Ft2が決定し、関西での放送希望メールが505件ありました。
- 26日 「HEY！HEY！HEY！元気が湧いてくる！アイドルの祭典スペシャル」の短縮版放送に88件の問合せや苦情がありました。

2) ACAP関連の活動について

現在当社は、ACAP（消費者関連専門家会議）に属しており、番組視聴者の方々と接する業務を行う部署を中心に、ACAPの西日本支部例会に毎月出席し、交流を深めています。

4月の例会の講演には、当社の関アナウンサーが、「プロに学ぶ話し方、伝え方」のテーマで話し、「話し方で、印象が変わることに気づかされました」など、大変好評で

した。6月は「日本生命コールセンター」、8月「ミツカンお客様相談センター」の取り組みについての講演があり、他企業のお客様対応を学びました。

また9月の例会では、大阪府警本部の方から、電話を使った詐欺などについての防犯対策を学びました。

3) 「月刊カンテレ批評」について

毎月最終日曜日放送の「月刊カンテレ批評」は、冒頭にオンブズ・カンテレ委員会の報告など「関西テレビからのお知らせ」で情報公開を行っています。

そして、いくつかの「視聴者の声」を取り上げ担当部署から回答する形を従来から行っています。さらに、番組の演出方法について是非を問う「メディア批評」コーナーでは、コメンテーターの井上章一氏から、毎回テーマを出していただき、批評をいただいております。

4月の放送では、「震災で番組演出はどんな影響を受けたか？」のテーマで、報道部と編成部の担当者が出演しました。5月は「放送局が映画を作る意味」のテーマで、関西学院大学教授 難波功士さんと、関西テレビ制作の映画「阪急電車」統括プロデューサーが出演しました。6月は「野球中継を考える」のテーマで、野球解説者 田尾安志さんが出演されました。7月は「地デジ これがゴールではない」のテーマで、立教大学社会学部准教授 砂川浩慶さんが出演されました。8月は「デジタル時代の放送局番組の課題」のテーマで、関西学院大学教授 畑祥雄さんが出演され、9月は「男性目線の番組作りを考える」をテーマに、遥洋子さんが出演されました。

また、番組の各回の最後には、番組審議会の委員の方々のご意見を紹介しています。「月刊カンテレ批評」は、当社の番組やイベントなどを自ら批評することで、より良い番組作り、そして「視聴者と心でつながるテレビ局」を目指すための一助としての機能を保っています。

(3) メディアリテラシー推進活動の現状

1) 活動全般について

当社のメディアリテラシー推進活動は、2007年に本格的な取り組みを始め、今年で5年目に入ります。この活動の推進は、メディアリテラシー推進部が中心となり、全社横断の組織“心でつながるプロジェクトチーム”とで行っています。

プロジェクトチームの会議は毎月1回開催されており、メンバーが活動報告や企画提案、情報交換などを行っています。

それらの活動と並行して、メディアリテラシー番組「テレビのミカタ」（毎月1回、通常第3日曜日午前6時30分放送）の放送も引き続き行っており、メディアリテラシー

の実践活動と効果的に連携させ、成果を上げるように工夫をしています。

また、当社ホームページには、心でつながるプロジェクトチームの活動が掲載されております。

2) 出前授業について

「出前授業」は、青少年へのメディアリテラシー教育の一環として活動を当初より行っております。2010年初よりホームページ上での一般公募を始め、2011年7月以降は、1ヵ月に1校のペースで社員が出前授業に取り組んでいます。

まず、7月13日に、大阪市内の高校・1年生を対象に「テレビ局の仕事」について講義をするため講師を派遣しました。若い人たちが「今のテレビに期待すること」など貴重な意見交換もでき、私たちにとっても有意義な時間となりました。

また、9月16日には、大阪市内の中学校・1年生を対象に「東日本大震災をどう伝えたか」というテーマで講義をするために、実際に取材をした記者を派遣しました。講義を受けた生徒らは、後日、講義内容を壁新聞にするという試みに取り組み、その模様は「テレビのミカタ」で紹介しました。

さらに9月30日には、泉南市内の小学校・5年生を対象に「ニュース番組ができるまで」についての講義をするため講師を派遣しました。報道技術部の社員による簡易中継を体験してもらった授業は初めての試みとなりました。

3) 制作支援活動について

3年目の活動として、「中高生のための映像作品制作支援プログラム」があります。これは、近畿地区の中高生を対象にした軽音楽系クラブのコンテスト「We are Sneaker Ages」(ウイ・アー・スニーカーエイジズ)に挑戦するクラブメンバーの姿を仲間が取材し、ドキュメンタリー作品を制作するという試みです。前回は、私立京都光華高校と奈良県立橿原高校が参加し、2011年3月に完成した作品の上映会を当社で行いました。

今回は、武庫荘総合高校と阪南大学高校の2校が参加しています。この活動は、中高生の映像作品制作を支援する過程で、送り手と受け手が、互いのメディアリテラシーを学習するというものです。高校生自ら、企画・構成を考え、撮影・編集を行います。

4) メディアリテラシーの共同研究等について

関西大学社会学部との間で進められている連携講座「マスコミ制作実習」も3年目となり、4月から毎週、2コマの授業が行われ、長い制作現場キャリアを持つ社員が登壇し、授業を行っています。

今年度の上半期は、東日本大震災に関連して「今、私たちができること」をテーマに30秒のメッセージビデオ制作を行いました。短い時間の映像の中に考えや思いを凝縮

させて表現することは、学生にとっても非常に難しいことですが、受講している 26 名の学生は撮影・編集機材の扱い方から作品コンセプトの決定、そして伝えたいことを伝えるための映像表現法を実際の作業を通じて試行錯誤しながら学んでいます。

なお、学生が制作したメッセージビデオは、8月21日放送の「テレビのミカタ」で紹介されました。

5) メディアリテラシーイベント「オープンスクール@カンテ〜レ」

2010年に引き続き、2回目となるメディアリテラシーイベント「オープンスクール@カンテ〜レ」は、8月21日に当社スタジオ「なんでもアリーナ」と1階の公開空間の「アトリウム」を会場に開催し、「なんでもアリーナ」では、テレビ局ならではの公開授業「キッズリポート体験」「ドラマの舞台裏」「これがスポーツ中継だ」を3時限にわたって行い、あわせて520の方に授業に参加していただきました。

また「アトリウム」会場では、スポーツニュースが放送されるまでを体験しながら学べる特設スタジオやテレビ中継車の特別公開、地上デジタル放送を使ったゲーム、高校生が制作した映像作品展示ブース、取材カメラの歴史展など行い、アリーナ会場の参加者を含んで前回の1.5倍となる約1500人が来場されました。

来場された方々から「テレビを作るのが大変なことだとわかった」「番組制作の過程がわかり、これからのテレビの見方が変わる」などの感想をいただきました。

今後も、多くの方々に参加していただける取り組みとして、このイベントを継続させていきたいと考えています。

6) メディアリテラシー番組「テレビのミカタ」

メディアリテラシー活動のもうひとつの柱となっているのは、番組「テレビのミカタ」（通常毎月第3日曜日午前6時30分から放送 司会：杉本なつみアナ）です。

この番組では、当社が行っているメディアリテラシー活動をご覧いただくことにより、「メディアリテラシー」すなわちテレビを読み解く力について視聴者の皆さんと一緒に考えていきます。また、映画監督など映像制作の専門家のお話を聞き、映像作品の本質的な読み解き方を考えていきます。なお、2011年度上半期に放送された内容は、次の通りです。

4月：高校生が制作したドキュメンタリー

5月：スポーツドキュメンタリーとメディアリテラシー

6月：映画監督・高橋伴明氏「映画とメディアリテラシー」

7月：昨年の「オープンスクール@カンテ〜レ」を振り返る

8月：関西大学「番組制作実習」～今、私たちにできること～

9月：「オープンスクール@カンテ〜レ」の公開授業「キッズリポート」

(4) 節電、エネルギー対策等全社の取り組みについて

当社では、厳しい電力需給状況に鑑み、夏場のピーク時電力の抑制を目的として節電対策を進めてきました。具体的には、クールビズによる空調の室内温度設定のコントロール・社屋内の照明の間引きや一部消灯、エレベーターの時間指定運転停止、パソコンの節電設定の徹底などです。

全社員の節電意識を高めるために、「前日の電力使用量」の数値を土・日・祝を除く毎朝、社内のLANシステムに掲出して削減率を共有しました。結果は2010年の最大ピーク時との比較で7月の月間平均が前年比30.8%、8月が29.2%の削減となりました。2010年と比べると猛暑日がかかなり少なかったことも大幅な削減のひとつの要因として挙げられます。

また、エネルギー効率利用のために、電気メーカーと当社が2年間かけて共同で開発してきた「LEDブロードライト」を民放では初めて番組制作スタジオの照明として4月に導入しました。これにより、第1スタジオは、1ヵ月で約2,400kwhの消費電力（従来のスタジオ照明の約18%、スタジオ全体の約14.5%）の削減が可能で、照明の発熱量も同時に減ることから、空調に関する消費電力も削減されることになりました。

さらに技術関連では、アナログ放送終了に伴う放送設備の消費電力低下に加えて、生駒送信所における業務において空調使用を控えることや、マスターラック室の蛍光灯照明のLED化、そして今後、制作スタジオサブやVTRセンターのラック室のLED化を予定しているなど、今夏の節電対策だけにとどまらず、CO₂削減の観点からも、消費エネルギーの削減に積極的に取り組んでいきます。

(5) 会見等、企業情報開示の状況とホームページ掲載実績

1) 放送事業者の責務としての企業情報の開示

当社では、企業情報の開示を放送事業者の重要な責務と捉えており、定例社長会見（年4回、本期間中では5月及び8月）並びに当社ホームページ等を通じて、経営成績（業績動向）をはじめ、視聴率状況、番組改編情報等を適宜公開しております。また、本レポートを通じての定期情報開示も約4年にわたって行っております。さらにプレスリリースにつきましても、後掲のように番組だけでなく、技術関連やメディアリテラシー活動に関する事項など、幅広く行っております。

2) 社会的重要な事項に関する情報開示

当社では、事件事故等、社会に与える影響が大きいと思われる事項の適時・適切な情報開示を行っております。この期間では、7月24日に地上デジタル放送完全移行が

ありました。この件につきましては、経緯と経過など、各メディアからのお問い合わせに随時対応いたしました。また、8月の夏季社長会見では、社長より完全にデジ化への当社に関する経緯報告をいたしました。

3) その他 プレスリリースについて

この期間においては、以下のプレスリリースを行いました。

- ・DVDや動画配信
- ・デジタルサイネージの実証実験
- ・ドキュメンタリー「父の国 母の国～ある残留孤児の66年～」のヒューストン国際映画祭 最優秀賞受賞
- ・「ザ・ドキュメント 淀川2009 - 2010 ～知られざる生命の営み～」2010年度 映像技術奨励賞受賞
- ・当社開発“リアルタイム字幕システム”の平成22年度映像情報メディア学会「技術振興賞」放送番組技術賞受賞
- ・メディアリテラシーイベント「オープンスクール@カンテ～レ」の実施概要等
その他、各メディアからのお問合せ・取材申し入れなどの対応充足に努めております。

4) ホームページでの情報開示

当社では、視聴者の皆様をはじめとしたユーザーの方の利便性を考慮し、番組情報、並びに企業情報を速やかにお伝えできるよう心掛けたホームページ制作を実施しております。

【2011年度上半期に当社ホームページにて開示した企業情報は以下の通りです】

- 4月13日(水) 大韓民国 株式会社文化放送との友好協定締結について
- 4月22日(金) オンブズ・カンテレ委員会 特選賞決定
- 4月28日(木) 「代表取締役社長 ご挨拶」 更新
- 5月24日(火) 火曜よる10時新ドラマ「チーム・バチスタ3 アリアドネの弾丸」
7月スタート!
- 5月27日(金) 5月27日付 コンプライアンス・CSR レポート (2010年度)
- 5月31日(火) 平成23年3月期決算社長記者会見
- 6月24日(金) 第70回定時株主総会及び「役員担務」について
- 7月16日(土) 関西テレビの番組コンテンツを配信する、スマートフォン版
WEBサイト「KTV SMART」 サービス開始!
- 8月12日(金) 平成23年 夏季社長記者会見
オンブズ・カンテレ委員会 第9回 概要

第5 コンプライアンス態勢の構築

(1) リスクマネジメント態勢について

当社では2008年3月「リスクマネジメント態勢の確立に着手すること」を盛り込んだ内部統制決議の修正を決議し、リスクの特定、評価、対処、P D C Aサイクルの整備といった一連のリスクマネジメントシステムの確立に取り組んでいます。

その流れに沿って、2009年3月末に全社のリスク管理台帳並びに、リスクマップが完成し、具体的なP D C Aサイクルの構築に着手しました。

それらを実行する組織としては、役員を中心としたコンプライアンス委員会と、その下部組織として、番組内容以外のリスクを統括するリスクマネジメント会議と、番組内容に関するリスクを統括する放送倫理会議が設置されています。

2011年度に入ってから、7月に第3回のコンプライアンス委員会が開催され、リスクマネジメントシステムの新たな基本方針等を決定しました。

方針では、業務の多様化や社会構造の変化、そして災害等、リスク要因増加に対応するため、リスク管理台帳をベースとし、その見直しを含めたリスクの洗い出しに始まる全社的なP D C Aサイクルの継続実施やリスクマネジメント会議を通じた全社への意識浸透などが含まれています。

また災害対策については、実施可能な対応策については速やかに行ない、不測の自然災害等に備えた全社の態勢を構築していくことを目標としています。

さらに情報セキュリティ関連でも、ソーシャルメディア活用に関連する問題等の発生も考慮し、実効性ある施策を行うことを挙げています。これを受け、リスクマネジメント会議で具体策が決定され、9月にかけて「リスク管理台帳」の更新作業を通じたリスクの洗い出しを行いました。さらに10月以降、それらリスクについての対応方針を判断し、具体的な対応を各セクションが決定していきます。

P D C Aサイクルに沿ったこれらの作業を通じて、様々なリスク要因の存在と対応に関する情報を社内の各セクションで共有し、それらの問題についてライン職で深く話し合う機会を作り出しています。

今後も、このサイクルの継続実施で、各部のコンプライアンス責任者を中心に全社的な危機管理意識の徹底をはかっていきます。

(2) 情報セキュリティ態勢について

前項のリスクマネジメント態勢確立の一環として、当社では2009年4月「情報セキュリティ管理規程」「情報資産取扱要領」を施行し、全社で規程の実施・実行度を監査

し、問題点を洗い出すと共に浸透を図る具体的施策を始めました。

以降2年が経過した2011年度も、事務局のコンプライアンス推進部・総務部・システム情報部が、各部署とやりとりを重ねながら各種台帳の洗い替えを実施し、より細かな管理態勢を取っています。

また、USBメモリー等、外部記録媒体へのデータ書き込みについて、セキュリティ上許可されたものだけを可能とする制限の実施や、許可機器に対する棚卸作業も引き続き行っています。

一方、印刷された文書を含む情報資産のより完全な管理に向け、重要文書の施錠状況の確認を全社で行い、不備があった場合の報告と対応を短期間で行い、施錠管理の完全化と習慣化をはかっています。

また、近年ではツイッター等ソーシャルメディアに関するトラブルが社会問題化しています。各企業では、その対策と有効な利用方法が模索されていますが、当社では2011年度に入り本格的にソーシャルメディアに関する対応について、社内で協議を重ねてまいりました。

その結果、下半期ではありますが10月中旬に「ソーシャルメディア利用ガイドライン」が策定され、運用を開始しました。

これらの効果的な運用で、情報セキュリティ関連の事故や問題発生が減少するとみられますが、適時勉強会などを開催して、今後も社員への意識浸透をはかっていきます。

(3) コンプライアンス・ラインの運用について

当社では、社員等（社員、関係会社社員、派遣社員、業務委託社員、アルバイト等のすべての従業員、及び取引事業者の役員・社員その他の従業員）が、当社の業務に関する法令違反、社内規程違反又は企業倫理違反などのコンプライアンス違反行為等を発見した場合の内部通報制度として、2006年9月から“KTV・コンプライアンス・ライン”を定め運用しています。

この制度は、内部通報及び相談の窓口を社内（内部監査が担当）および社外（外部の法律事務所に委託）に設置し、適切な処理の仕組みを定めることにより、当社のコンプライアンス体制を強化し、もって、放送事業者として社会からの信頼・期待に応えることを目的とするものです。

2011年9月末で、制度開始からちょうど5年になりますが、この間に、あわせて14件の通報が寄せられており、調査を行ったものが10件、そのうちコンプライアンス違反と認定されたものは5件です。ちなみに2011年度上期の通報は0件でした。

第6 経営機構等について

(1) 機構改革と現状について

2011年6月の定期人事異動では、中期経営ビジョンの具現化を推し進めていくための組織改革、人員配置の組織改革を行いました。

具体的には、社内改革に一定の道筋をたてることができたため、当初の予定通り2年間の期限をもって改革推進本部を廃止し、社長室に秘書室を統合して、従来の社長室が行ってきた中期経営計画の策定とローリングなどの業務を経営企画部が、秘書室の業務を秘書部が担当しています。

そして、編成制作局を廃止し編成局、制作局、東京コンテンツセンターを新設し、編成部門と制作部門を分離することで両部門において意思決定の迅速化を目指します。編成部門は新たなコンテンツ戦略の策定とタイムテーブルの強化、制作部門はコンテンツ制作に関する権限と責任の明確化によりコンテンツ価値の最大化を目指します。東京コンテンツセンターは、編成制作局の一部門から局レベルにすることで権限と責任の所在を明確にしたコンテンツ制作～流通業務の深化を目指します。

また、編成局に総合情報部を新設し、地上波ビジネスプロジェクトで提言された組織の具現化で、編成部の調査業務を移管し、タイムテーブルを中心に視聴率だけでなく、営業情報や収支データなども集積して、地上波ビジネスモデルを深掘りした戦略策定支援を行うことを目指します。

さらに新たな制度を策定し実施していくに当たり、人事制度や給与制度を連携し、検証しながら方針策定することが必要であることから、人事部と労政部を1つに統合しました。また放送面では、CM素材のファイル化の流れに対して十分に情報を収集し、業界の動きに迅速な意思決定をもって対応してゆくため、CM部を放送業務局から営業局に移管しました。

その他、当社では大阪駅北地区の再開発への関わりを数年来検討してきましたが、当社の役割が提携する欧州の企業関連した部分の受託業務になったことを受け、ナレッジキャピタル推進部を廃止し、関連業務はメディア事業部が遂行していきます。

(2) 関係会社とグループ政策について

現在、関西テレビグループは、当社ならびに(株)関西テレビライフ、(株)メディアプルポ、(株)関西テレビハッツ、(株)関西テレビソフトウェア、(株)レモンスタジオ、(株)ウエストワン、(株)セントラルテレビジョン、(株)ウエルネスライフという子会社8社から構成されており、放送番組の制作や技術業務、通販事業などを行っています。

当社「中期経営計画 2011～2013」では、重点目標の一つとして「グループ一体経営の強化」が掲げられており、その実現へ向けグループ各社の経営ミッションを明確にし、グループ全体最適を目指すうえでの各社の経営課題については、必要に応じて子会社と協働して取り組んでいます。

そして上期では、当社「中期経営計画」と整合し、「グループ内事業・グループ外事業の区別」「事業会社における収支計画の作成」などに留意された「中期事業計画 2012～2014」がグループ各社で策定されました。

また昨年度、ソフトウェア開発やシステム運用・保守を主たる業務とする子会社と、ITを中心とするグループ経営基盤強化を目的としてスタートしたプロジェクトは、外部コンサルティングを交えながら今年度も継続しています。

第7 放送人倫理の確立に向けた 教育・研修等

(1) 社内研修について

当社では、2007年に制定した「関西テレビ倫理・行動憲章」を基準として、全社員に向け、放送人としての倫理の確立に向けた様々な社内研修を続けています。

2011年度も、4月に当社や関係会社に入社した社員約20人に対し、まる1日にわたるコンプライアンス研修を行いました。この研修ではまず、当社が4年前に起こした捏造問題について、その経緯や調査委員会から指摘された事項、さらにはそれ以降現在に至るまでの再生の道筋などを時系列に沿って理解を深めさせました。

また、グループディスカッションなどを通じて、番組制作などに関わる倫理や、企業のレピュテーションについて積極的に意見を交わしました。

さらに7月には、入社2年目と3年目の社員を対象とした研修や、新たに管理職となった社員を対象とした幅広い内容の研修会を行いました。

(2) 放送倫理・コンプライアンス研修会について

2007年から、外部講師を招聘し講演と意見交換を行う「放送倫理・コンプライアンス研修会」を行っています。この研修会は、2011年度に入ってから講師をお招きして2回開かれ、開催回数はこれまでに22回となりました。

4月11日には、東日本大震災や原発事故関連報道などでのメディアの在り方について、元神戸女学院大学文学部教授の内田樹氏に「街場のメディア論」のタイトルで、講演をお願いしました。

講演で内田氏は、当社の「あるある問題」などについても触れるとともに、震災報道において疑問に感じた点やメディアの「批評性」の必要などを語られました。また、「なぜテレビを見なくなったか」について「自分の知りたい情報を発信していない」「リアリティーがない」等、独自の考えも披露されました。

8月4日には、消費生活相談員で当社の番組審議会委員の大久保育子氏をお招きして、現在、社会的にも関心を持たれている通販番組と消費者問題について、事例を交えながら詳しく説明していただきました。

研修会の参加者は、各回ともに50人を超え、業務等の都合で参加できない者のために、社内のLANシステムに講演詳細を公開して、随時内容を確認できるようにしています。

さらに、2011年度下半期に入ってからですが、10月26日には、大阪弁護士会副会長の木村圭二郎弁護士が「テレビ局における暴排 芸能界暴排の一環として」と題して、

反社会的勢力の問題と現状についての解説と、放送局としてこの問題についてどのような対策を講ずべきかなど、分かりやすくお話しいただきました。

2011年度の研修会は、再び放送倫理や企業倫理、社会への貢献などに関する知識や情報を身につけることのできる場として大きな役割を果たしています。

当社では、今後も引続き様々な分野の識者の方々をお招きして、社員の倫理観の向上や、業務におけるスキルアップをはかっていきます。

第8 おわりに

最後までお読み頂きありがとうございます。

私たちは2007年1月の「発掘！あるある大事典Ⅱ」ねつ造問題をきっかけに、放送倫理に関する考えをはじめ、企業活動の詳細を広く公開してまいりました。

今回のレポートは、2011年4月から9月に至る半年間の私たちの活動について、社内の担当部局が自らの責任において執筆したものです。

執筆した者全員が、企業の社会的責任を肝に銘じ、これらの取り組みを行ってまいりました。皆さまにはこの「コンプライアンス・CSRレポート」によって、当社を少しでも多くご理解いただければ幸いです。

私たちは、自主自立の精神で番組を制作・放送し、視聴者の皆様から信頼される放送局を目指しています。

「エリアで最も必要とされるコンテンツ・メーカー」「ライフラインとして信頼されるテレビ局」をめざし、今後も事業運営に当たってまいります。

視聴者の皆さまには今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。